緑が丘

校訓
「ゆたかさ・たしかさ・たくましさ」
学校教育目標
「認め合い、学び合い、高め合う生徒の育成」

平戸市立田平中学校
学校だより第２７号
（令和６年２月）
文責　　西澤　庄藏

デジタル全盛の時代でも、アナログの象徴でもある「本（図書）の世界」へ誘います。

校舎巡回から。図書室前を通ると、本の貸出状況が分かるグラフが掲示されていて、1-2 が多く本を借りている状況に、「読書好き」が多いことを嬉しく感じていました。いつの間にか、そのグラフはなくなり、新規企画・「本の福袋」なる告知に代わっていました。「本の福袋?」という発想に驚愕したのを覚えています。本にも出合いがあることを知り、同時に、学校図書館支援員をはじめ図書に関わる先生たちの貸出冊数アップの苦労も感じました。

本は主に言葉で構成されています。よって、新しい言葉に出合うことで語彙力を鍛えられたり、行間から作者の思いを汲み取ることで思考力が鍛えられたり、さらに、本そのものに没頭することで集中力が鍛えられたりと、私にとっては「自分磨き」の手段にもなっています。

が、年齢を問わず読書が嫌いな人もいます。本校でも本の貸出冊数が少ない生徒も多数います。なぜでしょうか。YouTube 視聴と違い、読書は自分自身で扉を開かない限り語りかけてはくれないことも一因だと思います。そのような生徒たちにも読書の有用性を私の経験から声を大にして訴えます。作品から様々な考えに出合い、新しい「自分」がつくられます。大袈裟に言うなら将来の生き方の指針となるものにつながると思います。今回の「本の福袋」は本との出合いやすさを演出してくれているようです。

ちなみに、先生たちが生徒にお勧めする本のリストから、その一部を紹介します。大半が図書室に置いていると思います。中には「本の福袋」に入っているものもあるかもしれません。

○『桜風堂ものがたり』　村山 早紀 著（PHP 研究所）
○『約束の猫』　村山 早紀 著（立東舎）
○『おおかみこどもの雨と雪』　細田　守 著（汐文社）
○『下町ロケット』　池井戸 潤 著（小学館）
○『空飛ぶ広報室』　有川　浩 著（幻冬舎）
○『ひとり 15 歳の寺子屋』　吉本 隆明 著（講談社）

現在、テレビ放送されているドラマにちなんだ本も新刊コーナーに置かれていました。

私自身を振り返ると、家事と並行して「オーディオブック」なるもので耳から文学作品に出合う「ながら読書」も多くなりました。時間がある時には本を手に取り、デジタルとアナログを時と場に応じて使い分ける日々です。

学校では、図書室を利用し、ドラマ化された本とか、短編とか、手に取りやすいものから読むことをお勧めします。無理に人生訓を得ようと考えず、まずは本の楽しさを知ることから始めてはいかがでしょうか。

図書室の様子から

保護者の皆様へ　（読書に関係して）家庭読書（家読・うちどく）の推奨について

前号で田平地区小・中学校でのノーメディアデーの取組について掲載しました。「ゲーム依存」「スマホ依存」解消の一助とすることを目的に、週一（毎週月曜日）ゲーム機やスマホに触れないことについて、積極的な家庭啓発に努めることも申し合わせたところです。

そのノーメディアデーに「うちどく」を取り入れてはどうでしょうか。（県も「ココロねっこ運動」と称して家族 10 分間読書運動を展開していることもあり）ご家族で、わずか 10 分間でも、読書習慣のきっかけづくりとして取り組むことをお勧めします。どうぞ、ご一考ください。